

曲目解説

各校顧問の練りに練った選曲により、毎回充実したプログラムで注目されているジョイント。今回も話題作が目白押しです。あまりに新しすぎて、参考資料が見つからない曲も…。頑張って解説書きます。

各校演奏

「小組曲」より .小舟にて .行列

Petite Suite - Mov. En Bateau Mov. Cortège

クロード・ドビュッシー

Claude Debussy (1862-1918:フランス)

ドビュッシーは19世紀に主流だったロマン派音楽から脱却し、20世紀の近代音楽への扉を開いた作曲家である。1889年完成のピアノ連弾曲「小組曲」は、1907年頃に友人のアンリ・ビュッセルが管弦楽へ編曲、これが高く評価されて広く知られるようになった。本来は4曲構成だが、今回は優雅な雰囲気第1曲「小舟にて」、躍動的な第2曲「行列」を演奏する。

ハッピー・トロンボーン

Happy Trombone

ロブ・アレス

Rob Ares

ヨーロッパの出版社から楽譜が出ているため、英語圏以外にまで範囲を広げて検索したが、作曲者の経歴は見つからず。ところが検索を重ねるうちに、A.ウェニヤン(b.1942:オランダ)という日本でも知られた作曲家へと辿り着いた。オランダ語の解説の片隅に、両者の関係を暗示するような記述があり、あるいは同一人物かも知れない(*1)。謎多き作曲者による、3本のトロンボーンとバンドのための軽快な曲。トロンボーンはスライドを動かしてダイナミックに演奏する楽器で、視覚的な特性も加わり、聴いても見ても楽しめる曲となっている。(*1) 最近では、謎の作曲家R.フィンの正体が、B.アッペルモントであったという例がある(前から噂になっていた)

ガリア戦記

De Bello Gallico

バルト・ピクール

Bart Picqueur (b.1972)

若手作曲家ピクールは、近年「交響曲第0番」で一躍脚光を浴び、日本でも熱心な吹奏楽ファンに支持されている。ピクールの2007年新作は、古代ローマの将軍、ユリウス・カエサルを書き残した戦争記録「ガリア戦記」を音楽で表現した。新作のため参考資料が少なく、一部不明な部分もあるが、第1曲「Battle Field」(戦場)、第2曲「Ritual」(儀式)、第3曲「Victor...As It Seems」(勝利、その情景)...と訳して良いのか自信はないが、全3曲の組曲である。タイトルにも惹かれるが、緩急織り交ぜた展開はスリリングで、ときおり効果的に現れる不協的な響きは印象的。第1曲の後半は打楽器群が大活躍、第3曲では力強い歌声も加わり、勝利の歓喜に沸くフィナーレへと突き進む。最後は乾杯のシーンで幕を閉じる。

「交響曲第3番」より

第3楽章 *メスト (ナタリーのために)*

The Third Symphony - Mov. Mesto (for Natalie)

ジェイムズ・バーンズ

James Bernes (b.1949:アメリカ)

バーンズはカンザス大学で教授職を務めながら作曲を行っており、吹奏楽界で最も有名な作曲家の1人。1994年作曲の「交響曲第3番」(全4楽章)は最高傑作の1つで、その第3楽章には「ナタリーのために」(for Natalie)という言葉が付されている。これは作曲直前に生後半年で亡くなった娘、ナタリーがもし生きていたら語りかけたであろう言葉、そして彼女への別れを、切ないほど美しく描いた曲。優しいメロディは、まるで暖かな父娘の情景を想わせ、バーンズの深い悲しみが伝わってくる。最後は天国にいる娘への別れで幕を閉じる。

「素晴らしき3つの冒険」より

フィリップ・スパーク

第1曲 海底2万マイル 第2曲 気球に乗って5週間 Philip Sparke (b.1951:イギリス)

Three Extraordinary Journeys -

Mov. 20,000 Leagues under the Sea Mov. Five Weeks in a Balloon

スパークは金管バンド(金管+打楽器)編成の曲を得意とする作曲家で、これらの曲の多くが吹奏楽にも編曲されている。また、近年では最初から吹奏楽向けに作曲することも多く、スパーク作品は、吹奏楽界でも高く評価されている。イギリスの楽譜出版社(Angro Music)の代表も務めている。2005年、フランス北西部の町アミアン(パリの北約110km)で開催された催しに招待されたスパークは、この街にゆかりのある小説家ジュール・ヴェルヌ(1828-1905:フランス)が、ちょうど没後100年を迎えることから、彼の3つの冒険小説をタイトルとした全3曲の組曲を書き上げた。第1曲「海底2万マイル」、第2曲「気球に乗って5日間」、第3曲「80日間世界一周」の3曲であるが、これらは小説内容を情景描写した曲ではないため、物語を知らない方でも安心してお聴き頂けると思う。今回は第1曲、第2曲を演奏する。

エル・カミーノ・レアル

アルフレッド・リード

El Camino Real

Alfred Reed (1921-2005:アメリカ)

2005年に惜しまれつつ他界したリード博士。84年の生涯で5つの交響曲、7つの組曲など大作も含めて数多くの優れた吹奏楽曲を作曲し、近代吹奏楽の発展への貢献は計り知れない。

ところで本作のタイトルには「スペイン国王の道」の意味があるが、アメリカに実在する通りの名前で、カリフォルニアを南北に貫く国道101号線がそれにあたる。18世紀頃に入植した聖フランシス教会の修道士たちが、カリフォルニアの南にあるサンディエゴを起点として、北へ600マイル(約1000km)離れたサンフランシスコに向けて、礼拝所を設けながら布教活動をしていった。このルートを「エル・カミーノ・レアル」と呼ぶ。通りの名前と曲の内容がややミスマッチなのが気になるが、一般的な解説を紹介しておこう。曲は短い序奏に続き、スペインの熱狂的な3拍子の舞曲(ホタ)となる。中間部の哀愁に満ちたオーボエは、失った恋人をしのぶ歌で、悲しみは次第に大きな歌へと発展していく。後半部は舞曲が再現、過去の悲しみを大きな喜びのなかに包み込み、熱狂的にエンディングへ突き進む。1984年作曲の名曲。

歌劇「トゥーランドット」より

ジャコモ・プッチーニ

Turandot - A Selection from the Opera -

Giacomo Puccini (1858-1924:イタリア)

トゥーランドットは、イタリアの劇作家カルロ・ゴツツィ(1720-1806)が1762年に書いた戯曲。舞台は中国の紫禁城。氷のように冷たい心を持つトゥーランドット姫が求婚者に3つの謎を解くことを求め、出来ない者の首をはねてしまう。その中で、王子カラフが見事に謎を解き、姫の心を開く...と言った内容で、多くの作曲家によって劇音楽やオペラ化されている。

オペラ作曲家のプッチーニは、「トスカ」(1900)、「蝶々夫人」(1904)など、今日でも上演の機会が多い数々の名作を遺した。最後に取り組んでいたのが「トゥーランドット」であるが、プッチーニは1924年他界し、未完のオペラとなった。友人のアルファードが草稿に従って補筆、1926年に完成して初演が行なわれた。今回演奏するのは、2006年出版の後藤洋(b.1958)による吹奏楽版の新アレンジで、次の7つのドラマティックな場面で構成されている。

- | | | | |
|-------------------|-------|------------------|-------|
| 1. 序奏-「北京の民よ」 | (第1幕) | 5. 「世界のすみずみから」 | (第2幕) |
| 2. 「砥石よ回れ」 | (第1幕) | 6. 「われらが皇帝陛下万歳」 | (第3幕) |
| 3. 「だれも寝てはならぬ」 | (第3幕) | 7. 「おお神聖なる父君陛下よ」 | |
| 4. 「私の勝利が」(第3の問い) | (第2幕) | -フィナーレ(第3幕) | |

1年生合同バンド

ラッシュ

Rusu

サミュエル・ヘイゾ

Samuel R.Hazo (b.1966:アメリカ)

ヘイゾと言えば、「第14回演奏会」(2004)で市川西高校が演奏した「ライド」が有名である。これは2002年、インディアナ大学教授のJ.スタンプ(b.1954)が主催する作曲者フォーラムに参加したヘイゾが、その夜、スタンプの自宅での夕食会に招待され、スタンプの運転する自動車に同乗して、田舎道をトップスピードで走り抜けときの印象を曲にしたものである。車内から見た美しい景色、疾走するスリルや高揚感などが巧みに表現されている。スタンプが景気づけにギアチェンジを繰り返したのが原因だろうか、3分間の短い曲中に、実に60回以上もの変拍子が登場する技巧的な曲である。さて、今回演奏する「ラッシュ」については...

ミネソタ州にあるウェンガー社(*2)が、2006年に創立60周年を迎えるにあたり、ヘイゾに新作を作曲依頼した。ヘイゾは同社の工場を訪ねた時に聞こえてきた機械の打楽器的なリズムに惹かれ、このリズムをベースに祝祭的なテーマを加えて作曲を始めた。完成してみると、本来は書こうと思わなかった「ライド」続編とも言える曲に仕上がっていたとのことである。

作品が完成してもタイトルを決めかねていました。私はこのことをケネソー・マウンテン高校(初演団体)のデイヴィッド・スターンさん(指揮者)に話しました。その話をしてから、しばらくして私はふと「ラッシュ」という名前を思いつき、悪くないと思いました。すると、その翌朝デイヴィッドが私に電話してこう言ったのです。「サム、ぴったりの名前を考えよ。『ラッシュ』はどうか？」 スコア解説より(一部省略)

(*2) Wenger Corporation : 音楽関連をはじめ、色々と事業展開している。同社のウェブで「ラッシュ」を試聴出来ます。

ザ・リング・オブ・ブロッガー

- 太古の聖なる祭壇 -

The Rings of Brodgar - The Stage of an Ancient Ritual

八木澤教司

Satoshi Yagisawa (b.1975:日本)

八木澤教司さんは市川市在住の若手作曲家で、管弦楽曲、吹奏楽曲、アンサンブル曲など、手掛けるジャンルは幅広い。2002年作曲の「吹奏楽のための音詩～輝きの海へ」は、これを委嘱した市川市立新浜小学校吹奏楽部によってコンクール全国大会で演奏され、同部は平成14年度の「文部科学大臣奨励賞」受賞、八木澤作品が全国に広く知られるきっかけとなった。また、市川西高校吹奏楽部のために全4楽章の大作「ザ・ウエスト・シンフォニー」を4年計画で作曲、2006年3月に完成した。次々と新作を発表しており、創作意欲は衰えを知らない。

今回演奏する曲は、八木澤さんが取り組んでいる「世界遺産・古代遺跡シリーズ」第6作。2006年作曲。タイトルはイギリス・スコットランド北東部、オークニー諸島にある古代遺跡。緩やかに傾斜した丘に、薄い板状の巨石が60個(29個が現存)、直径103mの環状に配置されている。石の高さは最大4mもあり、紀元前2700年頃の建設とみられる。イギリスには、このような巨石の環状遺跡が他にも複数あるが、誰が何のために建設したのかなど謎も多く、天に向けて巨石を環状に並べた古代人の芸術性など、興味は尽きない。八木澤さんはこのオークニー諸島の遺跡を「古代の聖なる祭壇」と見立てて、イメージをふくらませて曲を書き上げた。時に優しく、時に荒々しく曲は展開され、最後は輝かしく荘厳なフィナーレを迎える。

シング・シング・シング

Sing Sing Sing

ルイ・プリマ

Louis Prima (1910-1978:アメリカ)

言わずと知れたジャズのスタンダードナンバーの1つ。1936年にプリマが作曲、瞬く間に人気曲となり、現在でも世界中で愛されている。2004年公開の映画「スウィング・ガールズ」では、女子高生がビッグバンドを組んでこの曲を演奏するシーンがあり、人気が再燃した。

2年生合同バンド

アレックス教授の冒険物語

Adventure Tale of Professor ALEX

清水大輔

Daisuke Shimizu (b.1980:日本)

教授は考古学を研究し続けて20年以上の歳月が経ち、ある地図を見つけた...
それは何千年も眠ったままになっているという財宝、そして不老不死の泉。
教授は意を決し長く危険な旅に出る...。そこで待ち受けていたものとは...

若手作曲家、清水大輔さんは近年、立て続けに吹奏楽の新曲を発表している。その作風はドラマチックなものが多く、吹奏楽ファンからも高く支持されている。本作は2005年に作曲された。作曲者の考えた想像上の主人公「アレックス教授」が繰り広げる冒険物語。しかし作曲者のヒントは上の説明文のみ。しかもこれは物語の序章部で、実際に曲に描かれているのは、この後に始まる冒険の部分である。詳しく説明すると先入観を持って聴いてしまうので、冒険の情景は一切伏せられている。アレックス教授はどんな風体で、どんな場所で、何を見たのか。ぜひ、想像力を働かせてお聴きいただきたい。どんな物語が見えて来るかな？

歌劇「皇帝サルタンの物語」より 3つの奇跡 リムスキー・コルサコフ

Three Wanders from The Tale of Tsar Saltan

Rimsky-Korsakov (1844-1908:ロシア)

サルタン皇帝は、ある豪商の3人姉妹の末娘を妃にしたが、2人の姉はこれを妬み、皇帝が戦いに出た留守中に妹が化け物を生んだと中傷したため、皇帝は妃と生まれたばかりの王子を樽に入れて海に捨てさせた。しかし、妃と王子は魔法の島に漂着し、王子は健やかに育った。ある日、熊ん蜂の襲撃から白鳥を救い、そのお礼として、 : 金とエメラルドの木の実を運んでくるリス、 : 33人の護衛の武士、 : 白鳥が美しい姫になる、という3つの奇跡をあたえられる ... (以後省略)

リムスキー・コルサコフは海軍士官の経験を持つ異色の作曲家である。19世紀後半に世界一周航海(3年間)に参加し、その過酷さゆえ音楽を諦めかけたが、航海中、世界中で見た自然の情景、特に「海」について強い印象を受け、帰国後、その経験を活かして素晴らしい曲を次々と書き上げた。1899年に作曲された「皇帝サルタンの物語」は全4幕のオペラで、物語は冒頭に紹介した通り。今回演奏する「3つの奇跡」は第4幕への前奏曲で、王子が白鳥を助けたお礼に与えられる3つの奇跡が描かれている。藤田玄播(b.1937)編曲版を使用[原調]。

サガ・マリーニャ

Saga Maligna

ベルト・アッペルモント

Bert Appermont (b.1973:ベルギー)

ベルギーの若手作曲家アッペルモントは、1998年に母国のレメンス音楽院を卒業後、本格的に作曲家として活動を始めた。手掛けるジャンルは多彩だが、吹奏楽曲のレパートリーが豊富で、日本でも演奏される機会が多い。そんな中で注目されるのが、2002年初演の全編吹奏楽によるミュージカル「Zaad van Satan」(サタンの種)だろう。魔女狩りの嵐が吹き荒れる中世ヨーロッパが舞台で、7名のソリスト、合唱団、吹奏楽団による18曲構成の作品である。日本での上演実績もなく、完全収録DVDも存在しないようだが、指揮者J.コベルの活躍を収めたDVD(Beriato:BMDS001)に、一部であるが、その熱演が映っており、貴重な資料である。

このミュージカル音楽を再編集して作られた組曲「サガ・キャンディダ」(魔女狩りの7つの印象)は、「第13回演奏会」(2003)で2年バンドが演奏し、大変好評であった。そして2007年、アッペルモントは同じ手法で第2組曲「サガ・マリーニャ」を書き上げた。新作のため資料が少なく一部不明な部分もあるが、タイトルは「不吉な魔女」といったニュアンスが含まれるとのこと。この話題作に2年バンドが挑戦する。今回の演奏は聴き逃がせない。お楽しみに！